

# 存在と記憶の距離感 第五話

オーバーリン



蘭が顔を歪め、我ここにあらずの様子で僕を置いてどこかに行ってしまった。事に及んだ際、彼女はいつもそんな感じだったな。彼女の悦に入る顔を思い浮かべている途中、ふと我に返って、「何を思い出しているんだか」と自嘲的な気分になった。何年も昔の事、もう二度と会う事もないだろう女の事、そんな事を思い出して一体何の役に立つだろう、それも何度も何度も。ぼうっと物思いに耽ると初めは違う事を考えていても、巡り巡って結局は蘭の事を思い出している。甘く切ない青春のなんちゃらと言う様な心もちでそうするなら、それはそれでいいだろう。けども、僕の場合は全然そんな感じじゃない、「奇妙だったな、珍妙だった、一体あれは何だったんだろう」と、腑に落ちないという気分が心に引っかかって、それで思い出してしまうのだ。もう今後解けるはずもない問題をウンウンと唸りながら考えている。フェルマーの最終定理だっけか。あれは証明されたんだっけな。

「ふんっ」

とやる気を出してベッドから上体を起こし、部屋の明かりを付ける。時計を確認すると、短い針が4の数字を指している。窓の外には橙色の空があって、「ああ、今日も研究室に行き損ねたな。」とうんざりする。もう何日行ってないだろうか。「明日は行こう」と思うのだけど、行けばきっと教授にゲンナリする程の嫌味を言われるんだろう。そう思うと、余計に研究室に行けなくなる。こんなんで卒業できるんだろうか、と言うよりも卒業できたとして、どうするんだろうか、俺は、俺は。

大学4年で日々研究室に通い、人類の未来の為に熱心に研究をおこなっているはずの僕。そんなはずの僕は卒業しても何になるということはない。大学院への進学が決定しているが、研究者になる気など毛頭ない。2年の延命措置に過ぎない。もし仮に僕がすっかりその気であったとしても、教授の方は僕を研究者にする気は毛頭ないだろう。相思相愛という言葉があるが、僕等の場合はその真逆も逆である。箱に閉じこもって若者をいびる仕事なんて、くそくらえだ。

とはいえ、じゃあ卒業したら僕はどうするのだろう。会社で働くのだろうか。そうならばひとまず安心ってところだが、いくら僕が働きたいと思ったところで、肝心の会社様の方が「うちで働いてください」と言ってくれない事には働けない。惚れた腫れたと一緒に一緒だな。では、その女みたいな会社が「うちに欲しい人材だ」と思うのはどんな人間か。という事が問題になってくる訳だが、それに関しては本屋さんにも行けばそれ専用の本がごまんと売られているから、詳しくはそっちを参考にしてほしい。

で、僕個人の問題に話を戻す。と、その前に、余計かも知らんが僕なりの意見とやらを書いておこうか、一応ね。きっと、会社様が欲しいのは、トイプードルみたいな奴じゃないかと思う。別にチワワでもいいんだけど、要するに愛玩犬みたいなやつね。同じ犬でも主人に噛みつくような犬は駄目、特にドーベルマンみたいな強くて獰猛そうなのはだめだろうね。ご主人様ビビっちゃうだろうから。そういう意味で言って、僕は何だろうな。まあ、愛玩犬じゃないだろうな、狩猟犬ほど強くも逞しくもないだろうけどさ。間にとって豚かナマケモノってところだろうか。まあ、どうでもいいか。

とにかく、僕は今宙ぶらりんな訳だ。何も生み出さず、親の金で呑気に反抗ごっこかましてる学生ちゃん。何の形も持たない。よく「モラトリアム」なんてカッコいい言葉にして言うけど、うんざりだね。早く労働者になりたいね。愛も夢も捨てて、ただ飯食うためにボロ雑巾のようになるまで働く労働者。僕は労働者になっても、そうなる前に適当にサボるだろうから、なれそうもないから、余計にカッコいいと思うよ。だから、タバコは労働者の煙草「ハイライト」を吸っているんだ、きついからメンソールだけどね。

そんなこんなをウダウダ考えながら、家を出てプランプラン歩いてたらお目当てのミニストップに付く。僕は雑誌を立ち読みしたりはしない主義なので（文字には金を払う、なくても払う）、真っ直ぐレジに行って注文する。

「ハイライトのメンソール一つと、グリルドックオリジナル一つ。」

「うい。」

店員がやる気無く返事をする。このコンビニの店員は本当にやる気が無い、そのせいか肌まで貼りが無くカサついている。まあ、コンビニの店員がやる気マンマンでもウザいけども。

金を払って品物を受け取り（ホットドックは少し待つ）、そそくさと店を出る。道すがらホットドックを頬張り、食べ終わる頃には家に付く。家賃37000円のアパート。都内ではありえないけども、茨城ともなればこの値段でそこそこましな家に住める。親の金だが。中古の車まで持っている、駐車場は無料だ。その車だって親に買ってもらった。ここら辺は車が無いとどうにもならんからな、チャリじゃどこにも行けない。本格的に閉じ込められる。

家に戻ったが、することもなく、論文を読まなければならないのだが、全く読む気は起きず、再びベットに横になる。そもそも、大好きな小説を読む気にもなれないのだから、植物のホルモンがどーとかというとんでもなくどーでもいい事が英語で書かれている論文なんて読む気になれる訳がない。がしかし、横になったものの、今日は既に17時間も睡眠をとっているためにそうすんなりと都合よく眠りは訪れない。そもそも、午後4時に起きる事が間違っている。どうせ今夜も明け方まで眠れず、明日は起きられず、また夕方に起きる事になるんだろう。悪循環、負の連鎖。どうしてこうなっちゃうんだ。くそったれが。

きっと、昨日の俺が悪いんだ。そして、昨日の俺は一昨日の俺のせいで悪くなったんだろう。そうやって元を辿っていくと、どこにたどりつくんだろう。そんな事分かったとて、何にもなるまいが。要するに、今日の俺が踏ん張らんことには、明日の俺はまた迷惑こうむる訳で、でも俺はそんな安っぽいハウツー本みたいな事に触発されるのが一番嫌いだから、踏ん張る訳にはいかないのであって。そもそも、頑張るといったって、凡に墮することなくそれをするのは容易じゃないぜこりゃ・・・。

グルグル、グルグル、また夢に落ちて。

薄暗闇の中で、二つの黒い大きな瞳が僕を見つめている。自分の瞳をまじまじと見つめることなどない。鏡を使えば可能なのかもしれないが、自分の顔なんていうものは見慣れないものだから、ずっと眺めているとなんだか頭がおかしくなってしまうようで変な気分になる。だから、瞳をじっと見つめる時は、その瞳はいつも他人の瞳だ。

何を見つめているのか、それが知りたくて蘭の瞳をじっと見つめ、奥の奥まで見ようとして、でも彼女の瞳にはじっと見つめる僕の顔とその後ろの部屋の様子が映るばかりで、結局蘭が何を見ているのかなんて分からない。すると蘭はニッコリと笑って、

「ヒロトでいっばいだよ。」

と言う。僕は何て答えればいいのか分からなくて、ただ

「うん。」

とだけ言って、ちょっと弱った様な曖昧な表情を作って微笑み返す。

見つめ合っているのが気まずくなって、視線を外す。そこには半裸の肢体が横たわっていて、それを紫色のブラックライトが照らして、何とも言えない色をしている。太陽の光の下で見る人間の肌はこんな色をしていない。その肌の色を見ているのも嫌で顔を上げると、部屋の壁には海面から飛び上がったイルカの絵が浮き上がっている。部屋に入った時には気付かなかったから、ブラックライトで浮かび上がる様な蛍光塗料を使っているのだろう。この部屋は蛍光灯の明かりを消すとブラックライトが光る様に出来ているのだ。カラオケボックスの一室で、僕と蘭はつながっている。

セックスの時に限って、蘭は雄弁だった。喘いだり、愛していると言ったり、少女マンガの受け売りの様なセリフを並べたてたりと、忙しい事この上ない。そのくせ、普段は（例えば喫茶店にいる時とか、街を歩いている時とか、要するにセックスをしている以外の時）全く喋らない。僕が一生懸命に尾崎豊や村上春樹の素晴らしさを説明してみても、うんともすんとも言わないで、僕の手を握り、指先でくすぐり、その大きな瞳を潤ませて僕を誘うのだ。

蘭は一事が万事、性にひっきりなしだった。映画館に行ってもハリーポッターそっちのけで、僕の手を自分の股間に導き、「触れ」とせがむのだ。潤んだ瞳で僕を見つめて、ニヤリとするのだった。隣の席の子連れの人その様子に気づいて、責める様な目つきで僕を睨んだ。でも、蘭はそんな事にはお構いなしだ。青いパンツにまあるいシミが出来ているんだ。

そんなんじゃないかった。もううんざりだった。好きで好きで、恥ずかしくてたまらなくて、チラッと目が合っただけで喉から心臓が飛び出してしまいそうになってしまって、会えない時に思い出せば胸が締め付けられて息が出来ない、16歳の僕が求めていたのはそういう類の関係だった。股をおっぴろげて「恥ずかしい」だなんて、ちゃんちゃら可笑しいや、と思った。

結局、蘭との関係は3カ月くらいで終わった。僕から連絡を絶った。メールが来ても、電話が来ても、シカトした。蘭からの連絡はすぐに来なくなって、ほんと胸を撫で下ろした。後になって「ひどい事をしたな、彼女を気づ付けたかもしれない」なんて思ってみたりもしたが、考えてみれば、というよりもそんな事を考えるまでもなく、僕はひどい事をしたのだし、僕にはそんな風に心を痛める資格さえもないのだと思い直した。反省して自己免責しようだなんて、何とも卑劣な行為だ。僕は、蘭との関係を放棄し、逃げ出したのだ。そしてその後、蘭と会う事は二度となかった。

それが一般的なものとかけ離れているのかどうかすら僕には分かりかねるが、とにかく僕が初めて女性という存在に直面した一部始終は今書いた通りだ。そして僕は、蘭という僕にとって初めての女性を通して、戸惑いというものしか感じえなかったのではないかと思う。その事は、その後の僕の女性との関係の築き方というか、距離感の測り方とか、そういったものに少なからぬ影響を及ぼした様に思える。影を落とした、という言い方が似つかわしいかもしれない。影響という点では、良かろうと悪かろうとそれが後を引くというのは当然の事なのかもしれないけれど。何度も思い出してしまうのは、それが出発点だったからに他ならない、と思っている。

蘭から逃げ出してから、今まで僕は何人もの女の子を好きになった。数え切れないほど、とは言わないけれど、両手の指の数に少し足りない位の人数の女の子を好きになった。その度に、ドキドキとして舞い上がって、一人でいる時にはその子の事を思って胸が苦しくて仕方がなくなった。でもいつも、一体どうすればいいのか分からなかった。気持ちのやり場に困って、もてあまし、途方に暮れた。きっと、「基準」が無かったからそうなのだ。いや、蘭という「基準」だけが僕の中であって、それは性というベクトルに振り切れてしまっていたから、僕は何も計る事ができなかったのだ。判断するという事が出来なかった。分かり合うという事も、分かち合うという事も、一向に僕の目の前に実感として表れる事はなかった。

そのためか、誰かを好きになる度に僕は怯え、恐れて、駆られる様に猛進した。真っ暗闇の中を疾走していたのだ。そんな僕の標的にされた女の子たちは、恐かったのか鬱陶しかったのか、その両方かあるいはそれ以外か、知らんが、僕には知りようもない事だが、とにかく結果としては、例外なく僕から逃げていった。

何も見えず、真空ならぬ真暗の中、そこは死の匂いの様なものと僕を感じる何かが充満していた。僕は焦り、苛立ち、胸の中がひりつく様に乾燥して、焦げ付いて、僕は痛みを癒そうと渴望し、本当に死に物狂いで駆けずり回ったのだった。それでも、それゆえか、僕は逃げ惑う彼女たちの後ろ髪に掠ることさえなかった。

しくじるたびに、僕はきっと他の男たちと同じ様に落胆し、「ああ、俺は不幸だ、誰よりも。また、それゆえに特別なんだ」なんて傲慢極まりない事を思い、しかしそれは位は敗者の特権じゃないかと開き直り、存分にいじけた。また、その度に数少ない友人をつかまえて、他人にとってはどうでもよい己が悲しみをのべつ幕なし捲し立てた。

「理解出来ん、僕程の天才がこの様な憂き目にあうとは。所詮この世なんて。ああ、くそつたれが、畜生め。女なんて死にくたばれ。」

と、この様な罵詈雑言を何も悪くない友人に浴びせかけ、迷惑千万であった。

が、懲りもせず、ゆえに何も学ぶ事もせず、暫くすると立ち直り、また疾走し、こけた。蘭から逃げ出して以来、今に至るまで、ずっとその繰り返しだった。ずっと暗闇の中において、これ以上下もないものだから、絶望すれど死ぬ事もなく、斜に構える事で何とか自分の中で体裁を保ち、斜に構えすぎてもはや寝そべり、開き直っていた。

つまり、僕は気付けば鼻つまみ者に成り下がっていた。コンプレックスを自信とす

り替えて、変な選民意識に毒され、自意識過剰極まりなかった。生まれたときは人並みに両親からその誕生を祝福されたのであろう赤子は、二十数年転げ落ち続け、今はもう平地にいる、奈落の底さ。

まあいい、分かり切った事を並べ立てても、卑下にすらならん。そんな僕でも今まで生きてこれたのは、これは一重に寛大な他人様のお陰だと思っている。他人様達はこんな鼻つまみをシカトする事もなく、笑い物という嘘をつき通してくれた。そうやって俺の悪意を飼い慣らしてくれた。感謝している。ありがとう。

僕はこれからも、命ある限り、疾走し続けるだろう。迷惑をまき散らし続けるだろう。そんな気がしている。だって、「基準」が振り切れたままだから。黙殺するか、抹殺するか、それともこのまま笑い物としてやり過ごし続けるか、殺生与奪の権限は全てあんた方が握ってるんだ。任せるよ。

ぼう、としていたら、また過去の屈辱を思い出してしまい、悪意が込み上げてきた。僕が座っている座席の目の前でも隣でも、そこかしこで、他人が騒ぎ立てているからだ。正論を正論のまま鵜呑みにし、決められた通りに酒を飲み、しかもたくさん飲み、卒業を祝い、楽しみ、ここぞとばかりに仲良しごっこを繰り広げている同世代の他人様共が騒ぎ立てるからだ。こいつらが真っ当に社会に出て、あるいはエスカレータの大学院に進学し、社会に出て、真っ当な社会の一員として活躍していくと思うと、この糞ったれな世の中をより盤石なものにしていくのだと思うと、吐き気がした。真っ当な他人さまは、真っ当を「基準」にして、俺を裁く、これからも。そして俺もこの席に参加しているという事は大学を卒業するという事であり、大学院に進学する事になってはいるみたいだが、いずれは他人様共にひっ付いて一人前面してその真っ当な社会に参画しないとはい切れず、無性に負けた気がするのであった。

就職活動という真っ当宣言（俺からすれば敗北宣言）を早々に諦めた俺は、世間一般で言うモラトリアムというやつを引きのばし、大学院に進学することにしたのだが、それも時間の問題だ。いよいよ年貢の納め時が迫ってきているという気がする。あぶく銭で身も心も売り渡さなきゃならん。

まあいい、もういい、どうでもいい。俺も男だ。父母も安心させなきゃならんし、嘘でも身の程を知ったふりをしなけりゃならんのかもしらん。「はい、そうです。」と言って、卑屈な笑い方をすればいいんだろう。ああ、くだらねえ。

考えなけりゃ、呑みこまれちまう。でも考えてたら、裁かれる。俺は出る杭として打たれ続けてきた気がするが、それもこれも、あの始まりのお陰だったんだろうと思う。蘭が俺に振り切れた「基準」をくれた時から、こうなる事は決まっていたんだろうと思う。蘭は何も語らず、その術を持たなかったのかもしれないけれど、ただひたすらに俺を求めた。多分、「俺」ではなく「誰か」、誰かの中に救いを求めたんだろうと思う。でも俺は君に「救い」を差し出せなかったし、それが何なのかすら分からずに、逃げ出した。

ずっと、ひっ掛っているんだ。だからあれ以来、僕はずっと君の求めていた「救い」の答えを解き明かしたくて、本ばかり読んでいたよ。映画も見たし、AVなんかもよく見た。僕はそれこそ真剣に、血眼になってAVを見たよ、画面の中に答えはあるんじゃないかって思って。他の男が自己処理する為に見るのなんかとは訳が違ったんだよ。数え切れないほど見て、中にはとても素晴らしい作品もあって、それを撮っている監督が、僕と同じようなものを捜しているんじゃないか、なんて思ったりもした

。本なんかは特に露骨で、グッとくるものは大体、僕と同じ方を向いて走っている人が書いていた、と思った。勘違いかもしれないけどね。

表現というもののの中に仲間はたくさんいて、ずいぶんと勇気づけられたけれど、みんな道の途中で、肝心の君が捜していた答えはなかなか見つからないよ、蘭。でも、待っててくれ、見ていてくれ。俺は、捜し続けるから。途中、他人様の社会と契約を結んだり、他にも色々あるかもしれないけれど、きっと見つけ出してあげるから、待っていてくれ。もう逃げたりしないから。なんてったって、君は僕が出会った最初の女の子だからね。君が、道を指し示してくれたんだから。

## 存在と記憶の距離感 第五話

<http://p.booklog.jp/book/24113>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24113>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24113>